
魔法少女リリカルなのは ～嵐が吹く時～

束 紗季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～嵐が吹く時～

【Nコード】

N3913Y

【作者名】

東 紗季

【あらすじ】

海鳴市に住む一少年、あまぞら天空 あらし嵐が魔法と出会い、魔導士となり、彼を中心に日常生活を送ったり、様々な事件を解決していく物語である。

プロローグ（前書き）

はじめまして！！

束 紗季と申します。

この作品は初投稿にして、処女作です。

至らないところだらけですが、暖かく見守ってけると幸いです。
それでは、どうぞ！

プロローグ

????「いつてきまゝす」

そう言つて家から出てきたのはあまそら天空 あらし嵐である。

バス停まで歩いていき、丁度バスが着ていたのでそれに乗り込む。

奥へ歩いていくと4人の少女が声を掛けてきた。

なのは「おはよー嵐君」

フェイト「おはよ、嵐」

アリサ「おはよ、嵐。早く座りなさい」

すずか「おはよう、嵐君」

声を掛けてきたのは、高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラ
ウン、アリサ・バニングス、鈴村すずかである。

嵐「おはよゝ4人共」

気が抜けた声で返事をした。そして、この日もいつもと同じように1日が始まった。

この物語は海鳴市に住む一少年天空 嵐が魔法と出会い、管理局のトップに立ち、空の覇者と呼ばれるまでを綴ったものである。

さあ始めよう。彼の物語を。

魔法少女リリカルなのは 嵐が吹く時 始まります。

ブローグ（後書き）

感想や改善点などございましたら、どんどん指摘してください。

第一話

クリスマスが迫っていたある日、嵐はアリサとすずかは塾が終わったので、一緒に帰っていた。

アリサ「はあく疲れたわ。 と言うか何でクリスマスが近いのに塾なんかあるのかしら!!」

すずか「まあまあ落ち着いてアリサちゃん。 しょうがないよ、私たちが通っている塾、結構有名な所だもん」

アリサ「そうであってもよ!! まったく・・・」

すずか「そうブスツとしてないで嵐君を見習ったら?」

そう言われてアリサは嵐の方を見る。

嵐「ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る〜」

嵐は歌いながらスキップをしていた。

アリサ「なんであいつはあんなに暢気なのかしら・・・」

すずか「あははは・・・」

アリサは嵐の姿を見て頭を抱えた。すずかは苦笑するしかなかった。
すると嵐は2人の方を向き

嵐「どうしたの2人共？クリスマスだよ、クリスマス！！年に一度のイベントだよ！！どんな料理がでて、どんなプレゼントが貰えるのかな？」

と言い、またスキップを始めた。

その言葉を聞いた2人は

アリサ「なんという能天気ぶり・・・」

すずか「それが嵐君のいいところじゃない？」

などと言っていた。

すると突然、嵐の動きがピタリと止まった。

その様子を見て不思議に思い、

すずか「どうしたの嵐君？」

と言われ、2人は周りを見てみると確かに人っ子1人いないことに気づく。

そしてふと上を見てみると、日が暮れて暗くなり黒い夜空ではなく見たことのない色の空だった。

3人は困惑していた時、前方から光が近づいていることに気がついた。

それはどんどん大きくなり速いスピードで此方に向かっていった。

アリサとすずかは恐怖でその場から動くことが出来ず、嵐は2人を庇うように前に立つが、やはり怖いのか足が若干震えている。

当たると思い目をつむっていると、ドンツという音が聞こえ目を開けてみると、2人の少女が空中に浮いていた。3人は目の前で起きていることに理解できずばーっとしていると、

????「大丈夫!？」

と聞いてきた。

とても聞き覚えがある声だったので見てみると、なのはとフェイトの姿があつた。

これが、天空 嵐が初めて魔法と出会った瞬間であつた。

第二話（前書き）

今回からちよつとだけ文の形を変えます。

気づくか気づかない程度なので気にせずに読んで下さい。

第二話

声の主がなのはであるということに気づき、そして空中に浮いている姿を見て、

アリサ「はあ!？」

すずか「ええ!？」

嵐「なあ!？」

と、とても驚いていた。そしてフェイトが、

フェイト「ごめんね3人共。色々聞きたいことはあると思うけど、今は聞かないで。ちゃんと後で説明するから」

と言に残してなのはと一緒に飛び去っていった。そして数十秒後、やっと理解が追いついてアリサは声を張り上げた。

アリサ「なっなんなのあれ!?!というか何、どうなっているの!?!」

すずか「おっ落ち着いて!!アリサちゃん」

アリサ「これが落ち着いていられるか!?!」

などと言っていると、

嵐「落ち着いて、アリサ」

と落ち着いた声でアリサに言った。

アリサ「なんでアンタはそんなに落ち着いているのよ!!」

と若干怒りながら尋ねてきた。

嵐「だから落ち着いてっつて。ちゃんとフェイトが後で説明するって言っていたじゃない。ちゃんと信じて待っていていよう。僕たちは友達じゃないか。だからっね?」

と言われ最後にニコツと笑ってきたのでアリサとすずかは顔を赤くしながら小さな声で「わかった」と言っていた。その後なのは達が此方に向かつてきて嵐達に、

なのは「今日のことについての説明なんだけど、クリスマスの日にしようと思っているの」

フェイト「もう時間も遅いし、みんなに言うつもりだったからなんだけど・・・」

と不安そうに聞いてきたので嵐は「大丈夫だよ」と告げた。

嵐「ちゃんと待ってるよ。本当のことを言つと、今すぐにでも聞きたいけど、言えない理由があるんだよね。だからなのは達が話してくれる日まで待ってるよ。それでいいよねアリサ、すずか」

そう問われてアリサは渋々と、すずかはニコリと笑い頷いた。

なのは「ありがとう、みんな」

なのはは目に少し涙を浮かべて言った。その様子を見て嵐はまた二

コツと笑い、

嵐「さて、もう帰ろうか。時間ももう遅いしね。早く帰らないとお母さん達が心配しちゃう」

と言ったのでなのは達は頷き、5人仲良く帰宅した。

第二話

終

第三話

なのは達と別れた後、家に向かって歩き、約10分ぐらいしたら家が見えてきた。家は武家屋敷をリフォームしたものであり、かなりの大きさである。また、武術をしており敷地内には道場が3つあり、門下生で賑わっている。なのでかなりの敷地面積である。家の正面の門から入り、家に向かって歩いていき扉を開けた。

嵐「ただいまー」

そう言いながら家の中に入り廊下を歩いていくと奥からパタパタと誰かが駆け寄ってくる音が聞こえた。

????「おかえりーあーちゃん」

出迎えてくれたのは天空 宙そら、嵐の母親である。茶髪のロングで顔は一般にいう美女である。

宙「遅かったね。どうしたの？」

そう尋ねてきたので本当の事は話すことができず、適当に理由を繕った。

嵐「うん、なのは達と喋っていたら遅くなっちゃった」

宙「そう。でも今度から遅くなりそうだったらちゃんと連絡するのよ」

宙は嵐の頭を撫でながら言った。1分ぐらいそうされていると、

宙「さて、夕飯にしましょう。皆あーちゃんぐるのを待っていたのよ」

と言ったのでリビングに向かって歩き始めた。リビングに入ると、

????「おかえり、嵐」

????「おかえりーランくん」

????「遅いぞラン」

と声をかけられた。最初に声をかけてきたのは天空 神^{じん}、嵐の父親である。黒髪の散切り頭で緩い雰囲気^{ふんきゆうき}を纏っている優男である。しかし、家で開いている道場の総代でかなりの強者である。次に声をかけてきたのは天空 雫^{しずく}、嵐の2つ上の姉である。茶髪のポニーテールで母親の血が濃く美少女である。テニスをしており過去に何度も大会で優勝している。また、家の道場にも通っておりなかなかの実力者である。最後に声をかけてきたのは天空 晴^{はる}、嵐の1つ上の兄である。黒髪のショートウルフで父親の血が濃く、緩い雰囲気^{ふんきゆうき}を纏っている。母親の血のお陰か、かなりのイケメンである。サッカー^{サッカー}をしており、何度もチームを日本一に導いている。天才と呼ばれており、将来の日本のサッカー界を背負う1人だと言われている。(家族で嵐のことを、あらし・と呼ぶのは神だけである)

嵐「ただいま、お父さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん」

そう返事をしながら椅子に座った。

神「遅かったね。何をしていたんだい？」

宙「なのはちゃん達とおしゃべりしていたそうよ」

神「そうなのか？」

嵐「うん」

神「そうか。でも今度からは気をつけるんだぞ」

嵐「はい」

雫「ねえねえランくん、なのはちゃん達とどんな話をしていたの？」

嵐「うーんとね、学校ででた宿題についてや好きなデザートについてなどかな」

晴「ふーん。つかさ、喋っていただけでこんなに遅くなるか？」

雫「なるものなの。まあサッカー馬鹿の晴には分かんないでしょうけど」

晴「なんかムカつく言い方だな」

雫「けど本当のことでしょう」

嵐「お、落ち着いてお姉ちゃん、お兄ちゃん!!」

そんな風に話していると夕飯ができ、机の上に置かれる。

宙「さて、遅くなっちゃったけど食べましょうか」

「「「「いただきます」「」「」

そう言つと食べはしめた。

夕飯を食べ終え、風呂も入り終え、嵐は自室の布団の中で今日の出来事について考えていた。が、なのは達が話してくれたらわかるだろうと思ひ目を閉じて眠りについた。

第三話 終

主人公詳細設定1（前書き）

ここで主人公の設定をのせます。
話が進むのと合わせて設定を更新していきます。

主人公詳細設定1

名前：天空あまぞら 嵐あらし

性別：男性

誕生日：9月27日

年齢：9歳

身長：139?

容姿：焦げ茶色の髪で後ろだけ長く伸ばしてあり、背中ぐらいまであるのを先端で結んで流している。端麗な顔つきである。

性格：物事を楽観的に考える。頭の回転はかなり速い。かなり頭がきれる。

好きなもの：紅茶、緑茶、麦茶

嫌いなもの：きゅうり、漬け物

趣味：料理、チェス

補足：家で開かれている道場に通っており、かなり強いので一目置かれている。

第四話（前書き）

話の視点が分かるようにしました。これで誰サイドの話が分かれば
いいなと思っています。

第四話

Side:なのは

闇の書事件から数日後、なのは達は嵐の家に向かっていた。何故かというと嵐の家でクリスマスパーティーが開かれるからである。何時もなら翠屋でやるが、今年から八神家も加わるため家が広い天空家でやるうということになったからである。

なのは「嵐君の家にいくなんて何年振りかな」

士郎「そうだね、最後に行ったのがなのはが5歳の頃だから4年振りだね」

桃子「久しぶりね」。元気にやっているかしら宙と神さん」

恭也「宙さんはどうかかわからないが、確実に神さんは元気だろうな」

美由希「そうだね。元気かな。雫ちゃん」高町家一同はとても懐かしがっていた。話について行けない他の人たちは少々戸惑っていた。

フェイト「ね、ねえなのは、嵐の家ってどんな感じなの?」

アリサ「そうね。この場で知っているのはアンタだけだし」

すずか「なんだかんだいって私たち嵐君の家に行ったことないしね」

そう聞かれてなのはは少し困っていた。

なのは「え」と、とりあえず家は和風だね。あとは口で説明するよ

り実際に見た方がいいよ」

と言われたのでなのは言うとおりにしようと思つた。
それまで話を聞いていたはやては、

はやて「ねえなのはちゃん、その嵐君っていう人ってどんな人なん？」

と質問してきた。

なのは「えっとね、いつも、なんかかなる、とか、まあいいか、つて言っているよ」

シグナム「大丈夫なのかそいつは」

ヴィータ「いや駄目だろ」

フェイト「あはは・・・」

すずか「でも嵐君かなり頭いいよ。この前のテストも全部100点取っていたし」

アリサ「あとチェスが得意だったわよね」

そこに高町家が話に加わり始めた。

桃子「チェスの腕前は凄いわよ。前に恭也と美由希としたのよね？」

恭也「ああ・・・。全戦全敗だったよ・・・」

美由希「嵐君容赦ないもの。最終的にはキングの駒以外全部取っていくんだもん。戦術も凄いいし」

士郎「後たしか凄く運動神経がよかったはずだよ」その情報を聞いてクロノは、

クロノ「聞けば聞くほど分からなくなってしまう。本当にどんな奴なんだ？」

ユーノ「とても気になるね」

リンディ「でもかえって会うのが楽しみね」

はやて「なんかよくわからなくなってくるなあ。じゃあ、見た目はどんな感じなん？」

なのは「とってもカッコイいの!!」

そう言ってしまう、なのははハッとしたが、はやてがにやついていることに気づいた。

はやて「へえ」。なのはちゃんが速攻で言うぐらいカッコイいんや。」「

なのは「いや、あの、その」

はやてがニヤニヤしながら聞くと、なのはは顔を真っ赤にしながら言い訳を考えていた。そんななのはの様子を見てフェイト、アリサ、すずかは少し不機嫌になる。そんな子ども達の様子を見ていた大人たちは微笑ましく思っていた。

そうこうしているうちに天空家が見えてきた。

なのは「見、見えてきたよ!!」

はやての攻撃を受けていたなのはそう言い離脱していった。はやては舌打ちをし、後で問い詰めようと思いながら家を見ると固まっていた。他の人も同じように固まっていた。

はやて「……え？」

クロノ「これは……」

ユーノ「なんて言えばいいかな……」

リンディ「……大きいわね」

シグナム「ここまでとは……」

ヴィータ「はやての家の何倍の広さだ？」

シャル「ざつと10倍くらいかしら？」

ザフィーラ（狼）「むう……」

アリサ「意外と大きいのね」

すずか「まあ私とアリサちゃんの家よりは小さいけど」

フェイト「……」↑思考停止中

皆が様々な反応をしているなかでなのは正面の門の前で嵐が居る

のを見つけた。

なのは「あ！嵐君だ！」

そう言うとなのは駆け足で嵐に駆け寄った。

S i d e : なのは O u t

S i d e : 嵐

門の前でなのは達を待っているとか方に向かってくるのが見えた。
向こうも此方の姿が見えたのか、なのはが駆け寄ってきた。

なのは「おーい、嵐くん！」

そして嵐の横にやってきた。

嵐「いらっしやい、なのは」

その後、他の人達も遅れてやってきた。

士郎「久しぶりだね、嵐君」

桃子「久しぶり、嵐」

美由希「お久しぶり〜嵐君」

恭也「久しぶりだな、嵐」

嵐「はい、お久しぶりです。士郎さん、桃子さん、美由希さん、恭也さん」

フェイト「嵐、家大きかったんだね」

すずか「ちょっとビックリしたよ」

アリス「ちゃんと前々からどんな家か知らせておきなさいよね」

嵐「あはは、ごめんごめん」

皆と挨拶を交わしていると、リンディとクロノ、ユーノが嵐に近づいてきた。

リンディ「初めまして、天空 嵐君よね。私はリンディ・ハラオウンと言います。フェイトの義母よ。いつもフェイトと仲良くしてくれてありがとね」

クロノ「僕はクロノ・ハラオウン。フェイトの義理の兄だ。よろしく」

ユーノ「初めまして、僕はユーノ・スクライアだ。なのは達とは友達なんだ。よろしくね」

嵐「初めまして、天空 嵐です。こちらこそよろしく願いします、リンディさん、クロノ君、ユーノ君」

クロノ「別に敬語でなくていいぞ。後、君は付けなくていい。」

ユーノ「うん。同い年ぐらいだしね。僕のことユーノでいいよ」

嵐「わかったよ、クロノ、ユーノ。僕のこと嵐って呼んで」

クロノ「ああ、わかったぞ、嵐」

ユーノ「了解、嵐」

リンディ達と挨拶を終えると、嵐ははやて達のほうに向かった。

嵐「えーと、八神さんだったよね」

そう不安げに聞いてきたのではやては微笑みながら、

はやて「そやで。覚えておいてくれたんやな。おおきにな。改めて自己紹介するわ。八神ははやてや。はやてでええで。よろしくな、嵐君」

嵐「うん、よろしくね、はやて」

そして2人は握手をした。その後嵐ははやての後ろに視線を向けた。

嵐「そちらの方々は？」

はやて「うちの自慢の家族や！！みんな、自己紹介しい」

はやてに言われ、各々自己紹介を始めた。

シグナム「私はシグナムだ」

ヴィータ「ヴィータだ」

シャル「シャルです。よろしくね」

嵐「はい、よろしくお願いします」

挨拶した後、ザフィーラに目を向ける。

嵐「この犬は？」

はやて「ザフィーラって言うんよ」

嵐「そうなんだ。よろしくね、ザフィーラ」

そう言いながらザフィーラの頭を撫でた。

嵐「じゃあみんな、家を案内するから付いてきて。いつまでも外で話していると風邪引いちゃうかもしれないからね」

そう言い、なのは達を連れて門をくぐった。

第五話

Side:嵐

正面の門をくぐり、母屋に向かって歩いていく。

フェイト「外から見て大きいと思っていただけ、凄く広いね」

すずか「和風で日本の美を感じるよね」

アリサ「私の家は洋風の造りだからなんだか新鮮だわ」

はやて「なあなあ嵐君。向こうに見える建物ってなんなん？」

嵐「あれは道場だね」

シグナム「道場？ということはこの家では何か教えているのか？」

嵐「うん。うちは剣術を教えているんだ。ただ、人数がとても多くて困っているんだけどね。ほら、あそことあそこにも道場があるよ。さっきはやてが聞いてきたのが第一道場、奥にあるのが第二道場、その向かいにあるのが第三道場なんだ」

ヴィータ「・・・どれもでけえな」

などと家の案内をしていると、母屋に着き玄関の扉を開ける。

嵐「お母さん、みんなを連れてきたよー」

嵐が声をかけると奥から宙が近づいてきた。

宙「ありがとね、あーちゃん。お久しぶりね、桃子、士郎さん。それに恭也君に美由希ちゃん」

桃子「ええ、お久しぶり宙」

美由希「お久しぶりです」

恭也「元気そうでなによりです」

士郎「久しぶりだね。ところで神は？」

宙「神さんなら居間で子ども達と一緒にテレビを見ているわ」

そう言う宙はフェイト達の方へ向いた。

宙「初めまして、嵐の母の天空 宙よ」

フェイト「は、初めまして。フェイト・T・ハラオウンです」

アリサ「アリサ・バニングスです」

すずか「鈴村すずかです」

はやて「私は八神はやてです」

シグナム「私の名はシグナムだ」

ヴィータ「ヴィータだ」

シャル「シャルと申します。こちらの犬がザフィーラです」

ザフィーラ「（ぺこり）」

リンディ「リンディ・ハラウンです。フェイトの義母です」

クロノ「クロノ・ハラウンです。フェイトの義兄です」

ユーノ「僕はユーノ・スクライアです」

各々が自己紹介を終えると、宙がなのは達を居間へ案内する。その間、窓から見える庭が凄惨、高そうな壺が置いてあるなど騒々ながら居間に着いた。扉を開けると神、雫、晴がいて、こちらを振り返った。

神「久しぶりだな、士郎。息災でなによりだ」

士郎「お前こそ相変わらずだな、神」

桃子「久しぶりね、神さん」

神「桃子もな。また士郎は無茶してないか？」

桃子「あの一件以来大人しく店を経営してるわよ」

神「それはなによりだ」

神達が会話をしている間、雫と晴は美由希、恭也の所へやってきた。

雫「久しぶりー！美由希ちゃん！」

雫はそう言いながら美由希に抱きついた。晴はというと、

晴「久しぶり、恭也。相変わらず元気そうだね」

恭也「それはこちらの台詞だ」

互いに嫌みつたらしくはなしていた。それぞれが話を終わると、フ
イト達の方に向き自己紹介を始めた。

神「初めまして、嵐の父の天空 神です。よろしくね」

雫「嵐の姉の天空 雫よ」

晴「嵐の兄の天空 晴」

そしてフイト達も自己紹介をした。そしてクリスマスパーティー
の準備に取りかかるうとした時、なのはが声をかけた。

なのは「あの、ちょっと待って下さい！！」

そうするとみんながなのはの方へ視線を向けた。

なのは「準備する前に話したい事があるのですが、いいですか？」

言い終えると神が喋り出す。

神「何か訳ありのようだし、いいよ。じゃあみんな、腰を下ろして
くれ。宙、お茶の準備だ」

そう言われ、各々が畳の上に座り、お茶を出される。嵐、アリサ、
すずかはあの日の事を話すのだと分かった。場の雰囲気収まった
所でののはが切り出す。

なのは「皆さんは魔法があると信じますか？」

第五話

終

第六話

Side：嵐

なのはが魔法について話し出してから数分、色んなことを聞いた。魔法は存在すること。この次元の他にたくさんの世界があるということ。それを管理しているのが時空管理局という組織であること。自分たちはそれに所属していることなど。高町家は既に聞いたのか、噛みしめるように聞いている。嵐、アリサ、すずか、天空家は最初驚いていたがなのは達が真剣に話しているので本当のことだとわかった。そしてなのはが語り終わると、場に沈黙が降りた。その沈黙は数分間続いたがそれを破ったのは嵐だった。

嵐「本当に魔法ってあったんだね・・・」

なのは「うん・・・。ごめんね」

フェイト「本当は言いたかったんだけどなかなか言い出せなくて」

アリサ「しょうがないわよ。ことがことなんだし」

すずか「そうだね。こんな状況じゃないと信じられないもんね」

なのは「それじゃあ・・・」

嵐「うん。僕は信じるよ」

アリサ「私も信じるわ」

すずか「勿論私もね」

なのはありがとうございますと頭を下げる。そして天空家の方へ向く。

神「そうだね。目の前で見たんだ。信じる他はないだろうね」

宙「なのはちゃんが嘘つくような子ではないものね」

雫「すごいねー。魔法だって!!」

晴「ビックリだな・・・」

天空家も信じている様子なのでなのはは一安心した。するとリンディが言いにくそうに言葉を発した。

リンディ「それですね、とても言いにくいことなのですが・・・」

そう言いよどんでいたが何かを決意し、言い続けた。

リンディ「晴君と嵐君に魔導士の資質があります」

晴「・・・は!?!」

嵐「ふえ!?!」

突然の事で驚く2人。ほかの人たちも驚いていた。

はやて「そ、それってホンマなん!?!」

リンディ「ええ。さつき調べて見たところ、2人にリンカーコアがあったわ」

晴「・・・まさかこんな近くに魔導士がいるなんて」

すると神がリンディに質問をした。

神「リンディさん、魔導士の資質があるってことは2人共魔導士にならなくてはならないのですか？」

リンディ「いいえ。資質があるというだけで必ずしもなくてはならない訳ではないです。本人がなりたいというのなら別ですが・・・」

神「そうですか・・・」

神は2人の方へ向き言った。

神「お前たちはどうしたい？魔導士になるのか、それともならないのか。」

そう言われ、嵐は戸惑っていたか、晴はキツパリと言った。

晴「俺はならないよ」

そう言い切ったのでなのは達は驚いていたが、リンディが理由を尋ねた。

リンディ「理由を聞いてもいい？」

晴「サッカー一筋だからだ。他の事をやりながらサッカーをしたくないし、出来るほど器用じゃないしね」

そう言われ、リンディや他の人たちも納得した。

嵐はというと、まだ戸惑っていてどうするか決めかねていた。すると、宙が微笑みながら嵐に言った。

宙「あーちゃんの好きにしてください。なつてもならなくてもどちらになつても責めはしないわ。それが貴方が決めた道なら、私は応援するわよ」

そう言われ、少しの間考え、そして決意してリンディに言った。

嵐「リンディさん、僕は魔導士になりたいです！」

リンディ「どうしてなりたいたいのかしら？」

嵐「この力を持っているということは何か理由があるはずです。その理由が何かはわかりませんが、いつか見つけたいからです。そして、なのは達を守りたいからです」

それを聞いたなのは達は驚いた。

嵐「前になのは達が魔法という力を使って守ってくれました。その恩返しという訳ではないのですが、今度は僕が同じ力を使って守ってあげたいからです」

リンディは嵐が本気だということがわかった。隣にいるクロノの方を見ると頷いた。

リンディ「貴方の思いはしっかりと伝わったわ」

クロノ「それでは話は早いかもしれないが、1ヶ月後に囑託魔導士試験を開始するぞ。実技はまだわからないが、筆記はするから準備をしておいてくれ」

なのは「私たちも手伝うよ!!」

フェイト「うん!!一緒に頑張ろうね!!」

はやて「そやね。一緒に空を飛びだいもんな」

クロノ「期待しているからな」

ユーノ「頑張つてね、嵐」

嵐「ありがとね、みんな!!」

そうして話がまとまったので宙が手をたたいてみんなにいった。

宙「さて、話も終わったようだし準備をしましょうか。なんだって今日はクリスマスなんだから♪」

そう言われ、みんなはワイワイと準備をし出した。そして数十分後にはパーティーが始まっていた。各々が楽しく話し合い、友好を深めていた。そうして夜は更けていった。

第六話

終

第六話（後書き）

やっとスタート地点まで来ることができました。さて、今度どうなっていくのでしょうか。
お楽しみ下さい！

第七話

クリスマスからの1ヶ月間、嵐は試験のため猛勉強していた。時折フェイトやはやてに聞いたりして着々と知識をつけていった。そして試験当日、嵐たちは公園にきていた。メンバーは嵐、なのは、フエイト、はやて、ヴォルケンリッター、それと宙である。何故宙がいるのかというと、自分も行きたいと言い、リンディに許可を取ったためである。公園で待っているとクロノから連絡が入る。

クロノ「みんな揃っているな。それでは、転送するぞ」

すると足元に紋章が浮かび上がり強い光を放った。嵐はたまらず目を瞑り数秒後目を開けてみると、そこは公園ではなく知らない場所だった。

嵐「ここは・・・？」

なのは「時空管理局だよ。私たちが働いている所」

宙「魔法って凄いわねー。一瞬で移動できちゃうなんて」

そう驚いていると、奥からリンディとクロノがやってきた。

リンディ「こんにちは、嵐君。ようこそ、時空管理局へ」

嵐「は、はい。こんにちは」

宙「こんにちは、リンディ。私も来たわよ」

リンディ「やっぱり来たのね・・・」

宙「当たり前でしょう。何たって息子の晴れ舞台なんだもの」

リンディと宙は話し合っていたが、クロノが咳払いをしたのでやめた。

クロノ「さて、準備はいいか？嵐」

嵐「うん。バッチリだよ」

クロノ「そうか、期待しているぞ。じゃあ試験会場に行くぞ。ついてきてくれ」

そう言うときクロノは歩き出した。嵐はみんなの方へ向き、

嵐「じゃあ、行ってきまーす」

と言い、クロノに付いていった。なのは達はその背中を見ながら各々に言った。

なのは「大丈夫かな、嵐君」

フェイト「大丈夫だよ。嵐ならきつと受かるって」

はやて「せやな。何やかんやいつて殆どの問題正解しとったからなあ」

シグナム「主の言うとおりで。心配する必要はないだろう」

ヴィータ「確かに。あいつなら直ぐに受かるだろうな」

シャル「そうね。私たちは受かることを信じてみましょう」

リンディ「心配じゃない？」

宙「大丈夫よ。何たって私の子なんだから」

そう言い、試験が終わるのを待っていた。

試験開始から2時間後、クロノと嵐が帰って来た。するとなのは達は駆け寄り試験結果を聞いた。

なのは「どうだったの、クロノ君!!」

クロノ「落ち着けなのは。大丈夫だ、満点で合格だ」

そう言うとみんな喜んで嵐に祝福の言葉を言った。一通り言い終えるとクロノが言う。

クロノ「じゃあ、次は実技に入るぞ」

フェイト「でもクロノ、嵐は一回も魔法使ったことがないんだよ」

クロノ「調べるのもこみでやるのさ。さあ、会場に行くぞ。母さん、みんなを傍聴席に連れて行ってくれ」

そう言うとクロノと嵐は歩き出した。リンディもみんなを連れて傍聴席へと向かった。

S i d e : 嵐 O u t

S i d e : なのは

傍聴席へ着き会場の方へ視線を向けると嵐とクロノがいた。実技の説明をしている所だった。

なのは「嵐君の魔力光は何色かな？」

フェイト「術式は何かな」

はやて「どんなんやろうな」。見ているこっちがドキドキするわ」

ヴィータ「お、やるみてえだぞ」

そうして嵐に視線を向けた。

S i d e : なのは O u t

S i d e : 嵐

試験の説明を受けた後、クロノから質問される。

クロノ「それで使うデバイスなんだけど、どんな形の物がいい？」

嵐「うーん、そうだね。剣の形をしたデバイスがいいかな」

クロノ「わかった。それじゃあこれを受け取ってくれ」

クロノから渡されたのは、刀身が70？の剣だった。

クロノ「では、今から魔法を発動させるぞ。意識をその剣に集中してくれ。そうすれば出来るから。」

そう言われ、目を瞑り意識を剣に集中させる。すると、自分を中心に何かが出ている事に気づく。目を開いてみると、自分から空色の魔力が出ていることに気づいた。そして足元を見ると、三角形の頂点に円がくつついた形をしている。

クロノ「魔力光の色は空色、そして術式はベルカか・・・」

クロノはそう呟いた。そして嵐から出ている魔力が収まり、ベルカの模様も消えた後、嵐は息を深く吐いた。

嵐「どうだった、クロノ」

クロノ「問題なしだ。次は試験に移るぞ。ぶつつけ本番になってしまつてすまないな」

嵐「大丈夫。ドンと来いって感じだよ」

クロノ「そうか。では相手を呼ぶぞ。すみません！！お願いします

「!!」

クロノが声をかけると奥の方から30歳ぐらいの男が出てきた。そして互いに向き合い距離をとった。

クロノ「この試験は僕が審判を務めます。僕が止めに入るまで続けて下さい。ただし、気絶した相手に攻撃を加えないようにして下さい」

両方頷いたが、相手の男がだるそうに言った。

男「相手が魔法を使ったことのない、しかも子どもかよ。ついてねーな俺」

聞こえたのか嵐はカチンときていた。

クロノ「それでは試験を開始する。始め!!」

クロノがそう言った瞬間、男の視界から嵐が消えた。男は急いで周囲を捜していると、ふいに背中から衝撃が走った。後ろを振り向くと嵐が足を振り抜いた姿があった。男は背後から蹴り飛ばされたことを理解した。そしてまた、嵐が視界から消え、今度は懐にいて剣を振り向こうとしていた。男はとっさにデバイスで防いだが、予想外の威力に驚きながら吹っ飛ばされた。

S i d e : 嵐 O u t

S i d e : なのは

なのは達は今日の前で起こっている事が信じられなかった。今日初めて魔法を使った子どもがベテランの魔導士の大人を圧倒しているのだ。そんな光景を見ても驚いていない人がいた。宙である。

宙「流石はあーちゃん。もう魔力の扱いに慣れたのね」

宙がいった言葉に全員が驚いた。

フェイト「ウ、ウソ！？だって嵐はさっき魔法を使っただけだよ！？」

はやて「そ、そうやで！？いくらなんでも早すぎるわ！？」

宙「そうかもしれないわね。でもよく考えてみて。生身の体であんなスピードが出せるかしら？ほら、あーちゃんの足元を見てみて。少し青白くなっているでしょう？」

そう言われ、見てみると確かに足が青白く光っており、魔力を使っている事がわかった。

ヴィータ「それでも異常だぜ。さっき魔法を使っただけかなのになんであんなに使えているんだ？」

宙「それは、あーちゃんが家で学んだ剣術のおかげかしら」

なのは「剣術？」

シヤマル「確か、彼の家に道場があったわね。それと関係しているのかしら？」

宙「その通りね。家では神天流という剣術を教えているの」

フェイト「神天流？」

宙「約1500年前から続いている流派よ。成立は飛鳥時代で日本最古の流派と言われているわ。刀や剣を用いるのだけれど、習い始めは刀剣を持たせずに体の動かし方を覚えさせるの。そして、動きに無駄がなくなったら師範代と素手で試合をするの。師範代に一撃を与えることが出来たらやっと刀剣を握ることが出来るの」

シグナム「師範代に一撃を与えることが出来ない者は？」

宙「ずっと刀剣を握ることが出来ないわよ」

はやて「と言うことは、嵐君はその条件をクリアしとるつつうことやな」

宙「そうよ。自分の体を自由に動かすことが出来、隅々まで知っているからこそ魔法の扱いが早いのだよ」

宙にそう言われなのは達は納得した。しかし、ヴォルケンリッター達の表情が険しい事にはやては気づいた。

はやて「どうしたん？みんな」

シグナム「いえ、少々気になる事がありまして」

フェイト「それって？」

ヴィータ「・・・あいつ、実践慣れしすぎじゃねえか？」

そう言われ嵐に目を向けてみると、嵐が繰り出す攻撃が全て相手の死角からである事に気がついた。

シャマル「あの動きも神天流なのかしら？」

宙「そうよ。神天流の練習内容は実践的な稽古なの。だから応用がきく動きも出来るし、死角からの攻撃も出来るのよ。その逆もまたしかり。この練習方法のおかげで、他の流派よりも圧倒的に強い。そしてもう一つの要因は型が無いということよ」

シグナム「型が無い？それはどういう事だ？」

宙「決まった動きが無いっていうことよ。そのおかげで、さっきも言っただけ応用がきく動きが出来るの。ただ、例外で2つだけ型があるの」

フェイト「それは？」

宙「天ノ型と地ノ型と呼ばれるものよ。天ノ型は速さを重視した型、地ノ型は一撃の重さを重視した型となっているの。ただ勘違いで欲しいのだけど、型であって型じゃないの。砕けた言い方をすると、心得みたいなものよ。それぞれの型を使う時はその特徴を守りなさい、ということなの」

なのは「と言うことは、今の嵐君の動きって天ノ型っていう事ですか？」

宙「そう言うことよ」

話を終わると同時に嵐が相手を気絶させ、試験が終了した。

はやて「あ、終わったみたいやで」

フェイト「結局勝っちゃったね」

なのは「凄いね、嵐君!!」

シグナム「ふふ……。一度手合わせをしてみたいものだな」

ヴィータ「あーあ。シグナムのバトルマニアに火がつきやがった」

シャル「嵐君、可哀想に……」

リンディ「圧巻だったわ。これは将来に期待ね♪」

宙「じゃあ、あーちゃんの所へ行きましょうか」

そう言ってみんなは嵐の所へ向けて移動し始めた。

S i d e : なのは O u t

第七話（後書き）

戦闘描写が少ない！！

今度戦闘がある時は多目に書きたいです！！

けど、中々難しい（Ｔ＾Ｔ）

第八話（前書き）

upが遅れてすみません。一応受験生なのでこれからも頻繁に遅くなるかもしれませんのでご了承ください。

第八話

S i d e : 嵐

試験が終わり、待合室でゆっくりしていると、なのは達が部屋に入ってきた。

なのは「お疲れ嵐君」

なのははそう言ってスポーツドリンクを渡した。

フェイト「凄かったね、あんなに強いなんて知らなかったよ」

シグナム「魔力は移動にしか使わず、技術だけで圧倒していたからな」

みんなが手放しに褒めてくれたので嵐は恥ずかしい反面、嬉しかった。するとはやてが嵐に質問してきた。

はやて「なあ嵐君。嵐君って神天流の中ではどのくらい強いん？」

なのは達も気になる話題だったのか、みんなが嵐に視線を向けた。

嵐は宙が話したんだなと理解し、質問に答えた。

嵐「うーん、どのくらいかなあ。正直よくわかんないや。でもこれだけは言えるよ。僕より強い人は沢山いる」

なのは達はその言葉を聞き驚愕した。さっきの試験で見た嵐の動きは凄まじかった。その嵐が自分より強い人があると言った。つまり、あの動き以上の事が出来るのだ。しかも沢山。なのは達は改めて神

天流の凄さがわかった。しかし、宙が嵐に横やりを入れる。

宙「ウソおっしやい。あーちゃんより強い人なんて20人ぐらいしかいないじゃない。まあ強いといってもその内の14人とは互角か一枚上手ぐらいの差が有るかどうかだけど」

宙がそう言ったのを聞いたなのは達は実際に嵐より強いのは6人しかしないことがわかり、なぜかホツとした。リンディはふとあることが気になり宙に聞いた。

リンディ「ねえ宙。神天流って何人ぐらい人がいるの？」

そう聞かれて宙は少し唸った後答えた。

宙「ざつと1000人ぐらいかしら？」

なのは達は固まった。そして頭の中である方程式が成り立った。

神天流の人数は1000人↓嵐より強い又は互角の人数20人↓実質嵐より強い人数6人↓嵐を含め残り14人は互角⇨嵐の強さは1000人中20番以内ということになる！！

この結果まで辿り着き、なのは達は絶叫した。

みんな「「「「ええー！！؟؟」「」「」

絶叫した直後にクロノが部屋に入ってきた。

クロノ「試験結果がでたぞって一体どうしたんだ？」

なのは達が呆けている事にクロノは疑問に思った。

嵐「なんでもないよクロノ。それで結果はどうだった？」

クロノ「ああ。まず筆記だが文句なしの満点だったぞ。そして実技だが・・・」

『実技』という単語が出てからみんなは息を呑んだ。

クロノ「当然の結果だが合格だ。それで調べてもらった結果を言うぞ。まず魔力値だがA A A +とかなりのものだった。それと技術だがS -という結果になった。ついでに言っておくと風の魔力変換資質があることがわかった。これらの情報から嵐のランクはA A A +となった。これで協力という形だが、管理局職員となったな、おめでとう」

合格と聞き嵐よりもなのは達の方が喜んだ。

なのは「やったあ！！おめでとう嵐君！！」

フェイト「おめでとう、嵐！！」

はやて「これで一緒に働けるな！！」

そう言いながら3人は嵐に抱きついた。

嵐「あっありがとう3人共。よっ喜んでくれるのは嬉しいんだけど、はっ離れてくれると嬉しいかな。ねっ？」

嵐に言われ、3人は今の状況を思い出したのか、顔を赤くしながら離れた。嵐は3人が離れてくれてホッとしていた。が、不意に誰か

に抱きつかれ顔を柔らかい何かで覆われた。

宙「凄いじゃないあーちゃん！！合格よ合格！！流石は私の息子だわ！！今日家に帰ったらパーティーね、お赤飯炊かなくちゃ！！ああんもう、おめでとうあーちゃん！！」

宙に抱きつかれていた。恥ずかしいので離れて貰いたいけど、今嵐の顔は宙の豊かな胸のお陰で埋まっていた。なので窒息寸前である。しかし、宙は興奮していて気づいていない。気づいてもらおうと必死にタツプするが逆に力が強くなってしまった。そして嵐は意識を手放した。

S i d e : 嵐 O u t

S i d e : なのは

嵐が気絶した後、ようやく宙が気づいた。急いで介抱しようとしたが慣れない魔法を使って疲れたのか、それともただ単に気絶したのかわからないが嵐はぐっすり寝ていた。無理やり起こすのも気が引けたのでそのまま寝かしておいた。場の雰囲気落ち着いたので、話題は先程の嵐の戦闘のことになった。クロノが嵐の強さについて聞いてきたので、宙がしてくれた説明を再び言った。それを聞きクロノは納得したのか、頷いていた。

クロノ「成る程、嵐の強さの理由はそう言うことだったのか。やっ
と納得できたよ」

クロノが1人で納得している頃、なのは少し気になる事があったので、宙に聞いた。

なのは「あの、ちょっと聞きたいことがあるのですけど良いですか。宙さん」

嵐に膝枕をしていた宙は顔をなのはの方へ向けた。

宙「なにかしら？」

なのは「えっと、神天流の人ってみんな嵐君ぐらい強いのですか？」

他の人達も気になる話だったのでこちらを向いて聞いていた。

宙「ふふ、確かにあの説明じゃそう思ってしまったても仕方がないわね。みんながみんなあーちゃん程強くないわ。大体、他の流派よりも2、3枚上手ぐらいよ」

シグナム「では嵐の強さは異端なのか？」

宙「さっきの説明であーちゃんが20番以内にいるということは言ったわね。神天流で20番以内というのは特別な」

なのは「特別？」

宙「そう。簡単に言うと次元が違うってこと。20番以内の人達はみんなあーちゃんのような動きが出来るのよ、しかもそれが普通であるが如く。因みに言くとあーちゃんは魔法を使わなくてもさっきの戦闘で見た動きは出来るわ。若干スピードは落ちるけどね」

はやて「ありえへん・・・」

宙「まあ普通は有り得ないわね。でもさっきも言ったように次元が違うのよ。本当に神天流の名を名乗っていいのはその20人だけ、本当の猛者だけなのよ」

言い終わると場に沈黙が降りた。その様子を見て宙は微笑んだ。

宙「ごめんなさいね、空気わ重くしちゃって。代わりに20番以内の人達がなんて呼ばれているか教えてあげるわ」

シャル「2つ名みたいなものですか？」

宙「そんな感じね。ウチでは段位と言っているわ。まず序列18～20位だけど例外で段位が無いのよ。理由は解らないわ。次に序列6～17位までは『十二星剣』と呼ばれているわ。名前の通り星座から取っているわ。4～3月の順で呼ばれているわ。因みにあーちゃん達は『十二星剣』の1人よ。序列8位、『十二星剣』双子座ね。そして序列1～5位はそれぞれに段位が与えられているわ。5位は剣星、4位は剣王、3位は剣皇、2位は剣聖、1位は剣帝と呼ばれているわ。なかなか面白いでしょ？」

フェイト「嵐が8位・・・」

ヴィータ「強えのは分かっていたが8番目とはな・・・」

みんな若干顔が引きつっていた。そんな反応を面白いと思いながら、宙は嵐を見た。ぐっすりと寝ていて起きる様子がない。その様子を見て宙はリンディの方に目を向けた。リンディは頷き、手を叩いて場を纏めた。

リンディ「じゃあ今日はもうお開きにしましょうか。案外時間たっているしね。クロノ、みんなを海鳴市に送ってあげて」
クロノ「分かりました。転送するからついて来てくれ」

そう言われたので、みんなはクロノについて行き転送してもらって海鳴市に戻り各々の家へと帰っていった。

S i d e : な の は O u t

第八話

終

第十話

Side: 嵐

嘱託魔導師試験に合格してから数日後、嵐はクロノに呼び出されて再び管理局を訪れていた。理由は嵐専用のデバイスが完成したので取りに来て欲しいということだった。一緒に来たメンバーはなのは、フェイト、はやてである。ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラは仕事が入っており来れないとのことである。嵐達はクロノに指定された場所に向かって歩いていった。

嵐「どんなデバイスかなあ〜？」

はやて「とりあえず剣つつうことは確実やね。これで剣やなかったら笑いもんやな」

フェイト「嵐は神天流序列8位だもんね。でもどんな形の剣かな？」

なのは「どんな形って？」嵐「剣にもいろんな種類があるんだよ。例えば片手で持てる物や両手で持つ物、刀身の刃が両方についていたり片方だけだったりね」

なのは「嵐君的にはどんな形がいいの？」

嵐「そうですね・・・片手で持てて両刃の剣だったらいいですね」と着いたみたいですね」

待ち合わせ場所に着き、中に入ると、そこにはクロノと知らない女

性が立っていた。

クロノ「よく来たな、嵐」

嵐「久しぶり、クロノ。それでそこにいる人は？」

クロノ「ああ、紹介するよ。彼女はエイミー、僕と同じくアースラに勤務しているんだ。因みに今回のデバイス制作に協力してくれたんだ」クロノが言うとエイミーが挨拶してきた。

エイミー「初めまして。エイミーです。君が嵐君かぁ。クロノから聞いていた感じと全然違うんだね、勿論いい意味でね。」

嵐「はっ初めまして、天空 嵐です。よろしくおねがいします」

挨拶が終わった所でクロノが話しかけてきた。

クロノ「さて、今回来て貰ったのは聞いての通り、君のデバイスが完成したからだ」

クロノが手を差し出してきた。その手にはブレスレットの形をしたデバイスが乗っていた。

クロノ「一応前の実技の内容を参考にして制作したんだが、もし使ってみて不具合が有るなら言ってくれ」

嵐はクロノのからデバイスを受け取った。見た目は普通のブレスレットなので本当にデバイスなのか疑っていたら音声が届いてきた。

デバイス《名称を登録してください》

嵐「うわっ!？」

驚き危うく落としてしまうところだったが、ギリギリのところでき
ヤッチした。そしてもう一度見ると先程と同じ音声が聞こえた。嵐
はようやく落ち着き、名前を考え始めた。少したった後、決めたの
でデバイスに呼びかける。

嵐「名称アトモスフィア、愛称はアトムだよ」

アトム《登録完了しました。これからよろしくお願いします、マス
ター》

嵐「よろしく、アトム」

登録が終わり、なのは達が声をかけてきた。

なのは「ふえー、これが嵐君のデバイスなんだね」

フェイト「見た目はインテリジェントデバイスだけど、剣のアクセ
サリーが付いているからアームデバイスなんだね」

はやて「なあなあ早ようセットアップしてみ」

嵐はクロノの方を向くと頷いていたのでOKなのだろう。

嵐「よし、じゃあアトモスフィア、セットアップ」

そう言うと嵐が光に包まれた。光が止み嵐の姿を見ると、足元
まである黒のラインが入った白の上着を羽織っており、黒縁の紺の
インナーと白のラインが入った黒のズボンを履いていた。髪は白の

紐で縛ってポニーテールになっており、左の腰には鞘に入った剣があった。なのは達は嵐の姿を見てまるで御伽噺の中の騎士のようだと思った。嵐は自分の姿を見て感激していたが、腰にある剣が気になり手に取ってみた。刀身90？あり白銀に輝いていた。特異な所があり、鐔の形がひし形が4つ合わさってXの字になっていた。カートリッジ式で柄の底からマガジンを差し込むようになっていた。嵐は鐔の形が気になりクロノの方に向くと、クロノはニヤリと笑い嵐に言った。

クロノ「剣に魔力を流して見る。そうすればわかる」

何か仕込んであることがわかったが素直に従い剣に魔力を流してみた。すると刀身と鐔が輝き始めた。すると鐔に変化が起きた。4つのひし形が分裂して2？程離れて一層強く輝きだした。その変化に嵐を初めとしてなのは達も驚いた。クロノは話し始めた。

クロノ「驚いてくれたか？ちょっとした機能として入れてみたがなかなか様になっているな。どうだ嵐、そのデバイス気に入ってくれたか？」

そう聞かれ嵐はクロノの方へ向いた。

嵐「うん、ありがとうクロノ。最高のデバイスだよ！！」

そう言いながらクロノの手を握りブンブン振っていた。そしてなのは達の方へ向き、言った。

嵐「これで魔法が使える準備が整った！！なのは、フェイト、はやて、これから魔法のことたくさん教えてね！！」

笑顔で言われ、なのは達も笑顔で言った。

なのは「うん!!任せて!!」

フェイト「頑張ろうね!!」

はやて「ビシバシといくで!!」

そう言い返した。こうして嵐の魔導師としての第一歩が始まった。

S i d e : 嵐 O u t

第十話

終

主人公詳細設定2（前書き）

主人公詳細設定パート2です。ついでにデバイスも。

主人公詳細設定2

魔力資質：A A A +

魔力光の色：空色

術式：ベルカ式

魔力変換資質：風

補足：神天流序列8位 『十二星剣』 双子座
囑託魔導師

デバイス設定

名前：アトモスファイア

通称アトム

待機状態：ブレスレット型

声：女性

武器：刀身90?の両刃の剣。鐔がXの形になっている。（イメージはTOGfのアスベルの剣、レイディアントハウル）

バリアジャケット：足元まである黒のラインが入った上着を羽織っており、黒縁の紺のインナーと白のラインが入った黒のスボンを身にまとっている（イメージはDOG DAYSのシンク・イズミの格好）

第十一話（前書き）

更新遅くなりました!!

またまた文の形が変わっていますがあしからず

第十一話

Side: 嵐

嵐がデバイスを受け取って魔法を使い始めてから1年がたった。その間、なのは達に魔法を教えてもらったり練習に付き合ってもらったお陰で着々と力をつけていった。

今では管理局屈指の実力者として認知されている。

僅か1年足らずでそこまで強くなれたことは嵐のセンスの良さが伺える。

そんなある日、嵐はなのはに話しかけていた。

「ねえなのは、最近頑張り過ぎだよ。少し休んだ方がいいんじゃないかな？」

「大丈夫だよ……。まだまだ平気だよ」

「なのはがそう言うのなら信じるけど……。でも、絶対に無理はしちゃダメだよ」

「分かっているよ嵐君」嵐は最近なのはが働き過ぎなことが気になっていた。

全然休んでいる様子もなく、日に日に疲れの色を濃くしていたことに心配していた。

休めと言っても大丈夫の一点張りであるので体に影響がでる前に無理やりにでも休ませようと嵐はその日思った。

数日後、嵐、なのは、ヴィータに異世界への調査任務が言い渡された。

S i d e : 嵐 O u t

異世界への調査任務を言い渡され、今現在艦で移動中である。
艦の中の一室でなのはため息をついていた。

原因はこのところの疲れである。

数日前、嵐には大丈夫と言ったものの、かなり辛いと思っていた。
体に疲労がのしかかってうまく具合に動かせないでいた。そんな時、
部屋のドアが開き、誰かが入ってきた。そちらに目を向けてみると、
嵐であった。

S i d e : なのは O u t

S i d e : 嵐

嵐はなのはの姿を見て心配そうに眉をひそめて尋ねた。

「なのは、やっぱり今回の任務は休んだ方がいいんじゃないかな？
様子を見ていても辛そうだし」

「心配し過ぎだよ。私は平気だよ？」

なのはは愛想笑いをしながら答えた。

その様子を見て無理をしていると嵐は判断した。けど、また任務から外れると言っても同じような返事が返ってくると思い、今回の任務はなのはのサポートに入ろうと思った。エース級である嵐は本来なら隊長クラスとして隊員に指示を出すのだが、なのはが心配なので他の人に任せてヴィータと共にサポートについた。

異世界に着き、調査を始めた。

内容はロストログアの存在の有無、不可解なところの調査である。

なのは、ヴィータは上空から、嵐は地上から調査を開始した。

嵐は魔力で身体強化をしながら走り、上空にいるなのはに目を向けた。

見た感じはいつも通りなのだが、嵐には無理に取り繕っているように見えた。

ここからでは何かあった時のフォローが難しいのでヴィータに任せることにして、調査に集中することにした。

S i d e : 嵐 O u t

S i d e : なのは

なのはは周辺をサーチしながら飛んでいた。

今の自分の体が疲労を負っているかなのはにはわかっていた。

実際、今もかなり無理をして魔法を使い、任務を遂行していた。

いつ墜ちてもおかしくない、そんなことを頭の中で考えていると、一緒に飛んでいるヴィータから声をかけられた。

「なのは、何か周りに反応があったか？」

「うっん、まだ反応はないみたい」

「そうか。じゃあちよつとスピードを緩めないか。そこまで急ぐことでもないしな」

なのははヴィータが自分のことを密かに心配していることに気がついた。そう思うとちよつと嬉しかった。

なのはが微笑んでいるとヴィータが不機嫌そうに聞いてきた。

「何笑っているんだよ」

「別に。ありがとうね、ヴィータちゃん。心配してくれて」

そうお礼を言うと、恥ずかしかったのか、ヴィータは顔を赤らめて明後日の方向を向いてなのはに言った。

「べ、別にお前のことなんか心配してねーよ！！そ、そうだ、嵐にも伝えねーとなー！！」

ヴィータは恥ずかしいのを隠すため嵐のいるところへ行こうとした。その時、なのはのサーチャーに反応があった。

なのはは身構え、周辺に目をやった。

ヴィータも気づいたのかなのはの方に向き直ると大声で叫んだ。

「なのは、後ろだ！！」

ヴィータにそう言われとっさに後ろにシールドを展開した。

ガキイイン！！

シールドに何かが当たる音が聞こえそちらを向くと見たこともない、機械がなのは目掛けて刃を振り下ろしていた。

なんとか防いだものの、体勢を崩してしまった。慌てて体勢を持ち直し反撃しようとしたが出来なかった。

なのはに限界がきたのである。

そのせいで飛行魔法が維持出来なくなり、落下しようとしていた。そんななのはに正体不明の機械は再び刃を振り下ろした。

シールドを展開しようとしても体が動かず出来ない。

もうすぐ側まで刃が来ている。

「なのは！！」

ヴィータが駆けつけてくるが間に合わない。

なのはは思わず目を瞑った。

ガキン！！

いつまで経っても痛みと衝撃がやってこなかった。

それに体の落下が止まっていた。

なのはは恐る恐る目を開くと目の前には焦げ茶色の髪をポニーテールにし、白色の上着を羽織った少年がなのはに迫る凶刃を剣で防いでいた。

「嵐君・・・」

そう名前を呼ぶとなのはは意識を手放した。

S i d e : なのは O u t

Side:嵐

なのはが気を失ったすぐ後にヴィータがこちらに着いた。

「なのは、嵐!!」

嵐は抱えていたなのはをすぐにヴィータに預けた。

「なのはを頼む!!僕はコイツを何とかしないとイケないから!!」

「わかった、無茶すんなよ!!」

そう言い残して離れていった。

なのはとヴィータが離れたのを確認して、片手で持っていた剣を両手で持った。

「アトム、コイツは!?!」

《解りません、データベースにも載っていませんでした》

「そう。でもコイツは倒さないといけないよなっ!!」

嵐は防いでいた刃を弾き飛ばした。

剣を横に構えて、

「はっ!!」

剣を振るった。

ズバアアアン！！

すると機械は横一文字に斬られて真っ二つになった。

すぐに機械から離れてその一瞬後、爆発した。

それを確認してすぐになのはとヴィータのところに駆け寄った。

「ヴィータ、なのはの容態は！？」

「まだ意識を失ったままだ。このままじゃヤバいかもしれねえ」

ヴィータは普段見せないような焦った表情をしていた。

嵐はなのはを担ぎながらヴィータに指示をだした。

「ヴィータ、船に連絡をいれて救護班を待機させるように言って！！」

「救護班をこっちに呼ばないのか！？」

「こっちに来るのを待つよりこっちから行く方が速い！！」

「わかった！！」

ヴィータは船に連絡を入れた。

入れ終わると嵐はヴィータをこちらに呼んだ。

「ヴィータ、掴まって！！」

掴まったのを確認すると、嵐は魔力を全開にして空を駆けた。

まるで疾風のように。

そしてしばらくたたない内に船のところに着き、待機していた救護班になのはを預けた。

救護班の人はなのはを受け取るとストレッチャーの上に寝かせ、運んでいった。

嵐とヴィータは力無くストレッチャーの上に横たわったなのはをただただ見送っていた。

第十一話

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3913y/>

魔法少女リリカルなのは ～嵐が吹く時～

2011年11月30日18時53分発行